

23

生徒たちが意欲的に取り組むキャリア教育と生徒指導

— 職業意識の高い生徒の実践事例から —

中間 茂 治 (藍野高等学校)

1. はじめに

看護師と言う職業は、他の職業と比べ労働条件が恵まれているにもかかわらず、離職率が高い。また、医療人としてのマナーや患者と接する態度、身だしなみ、そして、今時の学校教育で問題になっている生徒指導上の課題を改善されずに、そのまま就職して、看護師の質を下げているところがある。このような状況で、生徒たちに「生きる力」を身に付けさせる教育が必要とされ、学ぶことへの目的意識を持つ「キャリア教育」が必要とされている。

本校の衛生看護科における「キャリア教育」と「生徒指導」は、普通科の高校と比べて目的意識がはっきりしており、明確に指導しやすい。しかし、明確になっている分、日々の学業生活に取り組むきちんとした姿勢と態度が必要である。そのため、しっかりとした、職業観を身に付けさせ、社会人として自立できるようにしなければならない。そこで、本校で行われている「キャリア教育」と「生徒指導」について、上記のことを踏まえて考察していきたい。

2. 本校の特徴 (～2011年3月)

藍野高等学校は、2007年4月、衛生看護科高等学校(単科校)として開校し、5年一貫教育(高校3年准看護師、藍野大学短期大学部2年)

で正看護師を目指す学校である。一学年の定員80名で、全校生徒252名(男24名 女228名、2013年1月31日現在)が在籍している。本校は、「離職をしないたくましい看護師を育成する」という目標を掲げ、2007年4月から2011年3月まで、規律指導を徹底した全寮制教育(全員修学支援金制度受給)を行った。授業は平日7校時、土曜日4校時を確保し、放課後は、全員参加の部活動、体験学習(病院内アルバイト)を行った。三年生になると、全員が准看護師合格を目指し、夜間補習も開いた。また、行事も多く、例えば、体育祭、文化祭、親睦会、ナイチンゲール祭、戴帽式、クラスマッチ、そうめん流し大会、バーベキュー大会、焼き芋大会、修学旅行、第九コンサート等、短期大学との合同イベントや行事が、平均して月に一、二回はあった。生徒には何事にも一生懸命に取り組ませ、協力することの大変さや大切さ、完成時の達成感を体験させていた。そして、これらの行事は、寮生活での時間的な拘束が多いことから生じるストレスを発散させるためや、高校生活を活力あるものにすることを目的としていくために、大きな意味があった。本校の生徒は、校内にある寮から高校へ通学しているため、外部から見られているという緊張感が足りない。そのため、行事を通じて規律意識を徹底させ、あいさつをしっかりとでき、礼儀正しく振るまえるように根気強く、繰り返し指導を行い、文武両道をさせていた¹⁾。

3. 全寮制教育における規律指導

全寮制教育では、規律指導を徹底した教育を行っていた。例えば、寮では共同のお風呂、携帯電話の学校・寮持ち込み禁止、門限18時、服装の身だしなみ、スカートの長さ等、私立高等学校ではそこまで徹底すると生徒募集に影響を及ぼすのではないかと思われることを、次々に打ち出していた。看護師という職業にエリート意識を生徒に持たせ、日常生活を基本から変えることを目指し、全員が同じ目標をもった生徒が3年間相部屋で過ごしていた。同じ目標をもった生徒同士と一緒に生活させると、相互に刺激し合い、自分がどう生きたいかが明確になるばかりでなく、その目標に向かっていることが高校生活全体に意欲を与えた。本校の全寮制で育てる原理は「自覚」と「相互作用」であった。どんな看護師を目指し、どう生きてきたのか自分で考え（自覚）、次に仲間と相互に触れ合いながら刺激を与え合う（相互作用）ことで成長していた。生徒が早くから病院内で患者さんと関わりを持つため、医療人としてふさわしい人間形成として徹底した規律指導を行い、ルームメイトとは、常に看護のことを話し合える環境を作ることを行っていた。この取り組みが、生徒のやる気、マナー、学力、職業意識の向上につながっていた。

看護師免許取得というのは、5年をかけた生徒の個々の「自己実現」である。本校はその自己実現のプロセスの途上にあって、中間的かつ暫定的な目標としてそれを内側から支えるものであった。本校は卒業までのことを教えるのではなく、看護師として働いていけるその後を考えた指導をしなければならなかった。今の生徒は、上級学校や企業に入学・入社後、すぐに辞

める人が多い。これは、これまでの学校教育で「耐える・乗り越えられる力」を、生徒自身に届けられなかったのではないか。本校では、ここを乗り越えられる生徒を育てるために全寮制教育を行っていた。

4. 「キャリア教育」に結びつける生徒指導

本校の教育プログラムで「キャリア教育」を考えた場合、体験学習（病院内アルバイト）の存在が大きいと思われる。体験学習とは、職業倫理の獲得やコミュニケーション技術を中心とした、基礎知識の獲得、そして全寮制としての経済支援を目的としていた。主な業務は病院内の掃除や患者さんとのコミュニケーション、食事の配膳・下膳、ベッドメイキング、おむつ交換、車椅子の空気入れ、患者同伴の散歩などを行っていた。当初は、「毎回掃除ばかり」と不満を漏らす生徒や「患者さんとどう接していいかわからない」と悩みを抱える生徒もいたが、回数を重ねることで、学校生活では学べない患者さんとの関わりに対し、興味を持って意欲的に取り組み、進んで参加するようになっていた。学校では雑巾の絞り方がわからない生徒を目の前にし、どのようにして病院で掃除を行っているのか不安になる一方で、常に悩みを抱えてはいるものの、その悩みの内容にも成長を感じとれることができた。生徒自身、患者と関わることにより大きな心の成長がみられ、また、病院と関わりを持つ機会を通じて、社会性や感受性も高まり、大きく成長していた。本校は、目的意識を持って入学している生徒が多い。だが、一部の生徒は、家庭の事情で親から家を追い出されたり、修学支援金制度が充実しているから選択した生徒、将来像を描けない生徒に「求人が多い看護師」を目指せさせようと、親の強い

勧めで本校に入学した生徒もいた。そういった生徒は、病院内の業務を見せると、リアリティーショックを受ける生徒がいた。そんな生徒に対して、現場スタッフのきめ細かな指導や生徒指導が、「キャリア教育」に結びついていた。体験学習を通じて、将来自分が目指す看護師像が見え、病院内では、「話している人には黙って耳を傾ける」、「看護師の指示には従う」ことを前提として学んでいた。また、生徒自身の体験の場として、「看護師としての学習性が認められること」、「観察できる具体的な行動としてとらえること」、「適切なスキルをスタッフや患者に使うと周囲から好ましい反応が返ってくること」を学ばせていた²⁾。

5. 学校運営方針で示すキャリア教育 (2011年4月から)

2011年4月から通学可能になり、生徒の半数ぐらいが通学している。それまで本校の特徴であった全寮制だからこそできていたことが、全員同じことをさせる教育が難しくなった。例えば、体験学習、部活動、修学支援金制度等は、全員から希望者のみとなった。また、遅くまで生徒を残すことができないため、夜間補習、行事が縮小された。そのため、藍野グループ内の各病院で、経験豊富な看護師が高校現場で働き、指導することになった。

新しい学校運営方針で、「キャリア教育」を推進するのに核となるのが、本校の学章に書かれている「病める人々を医やすばかりでなく慰める為に」を基盤に、医療機関の特色を生かした生徒の基礎的・汎用的能力を育成する学校としてのことである。「キャリア教育」という言葉を具体的に表さず、全教育活動を通じた「社会人・医療人の育成」と定義している。社会人の

基本であるあいさつは、朝のあいさつ運動で、体験学習・病院実習は、「職業人の育成」と位置づけられている。全寮制教育から寮・通学選択制に移行して二年目である。さまざまな規則の見直しをせまられる中、教員側が追いつけていない状況がある。通学生と寮生がいきいきとしたカリキュラムを早急に完成していくことが本校の課題である。

6. 人権教育との関わり

本校は、衛生看護科ということもあり、他校と違う独自の人権教育の目標を掲げ、キャリア教育に繋がる人権教育を重視している。本校の人権教育目標は、「看護師の資質としての人権感覚の育成」、「医療現場におけるコミュニケーションを通じての人権感覚の育成」の二点を掲げている。看護師養成を教育の目的に据える本校では、病院実習等の社会的・実践的取り組みを通じて、人権について知り、考える機会を設ける。キャリア教育としての重点目標は、「職業倫理の実践的会得」「看護師の資質としての他者(患者)理解能力の育成」「職業意識の高揚と自己実現の意識化」である。第1学年では、新入生宿泊研修に力を入れ、「衛生看護科としての自覚と責任感を育成する」ことを目的にしている。通学生と寮生との交流・親睦をはかるとともに規律のある行動と基本的生活習慣の確立を図っている。第2学年では、修学旅行(2012年度は、山口県青海島・広島県平和記念公園)である。本校の修学旅行目的は、「人権」と「キャリア教育」を踏まえて、「平和」「体験」「交流」を重要視している。第3学年では、長期臨地実習オリエンテーションに力を入れ、最終学年として、看護の現場における意識を明確にし、病院スタッフ・患者との関わりについての人権問題学習

を行っている。

本来のキャリア教育を活かしながら、以前ほど規律指導はなくなり、退学者がほとんどいなくなった。しかし、看護師という職業にエリート意識を生徒に持たせるという生徒自身の意識が、薄れているように感じている。全寮制時代の規律指導か、現在の生徒との対話を重要とした生徒指導か、どちらが理想ではなく、今後の経験を重ね、今の高校生にあった指導方法をつくりあげていくしかないと思われる。

7. おわりに

本校における「キャリア教育」と「生徒指導」は、人格の形成に関わる究極的な目的において共通しており、生徒の社会生活における必要な資質や能力を育む生徒指導面に大きな役割を果たしている。共に最終的に求めることは、社会的・職業的自立をするための資質・態度を育成し、「生きる力」を獲得することにある。学ぶことへの目的意識を持つ「キャリア教育」は、「将来をより良く築き生きるため」であり、生き抜くためである。全寮制から通学可能になった本

校は、今の生徒の考え方に合った教育をしなければならない。生徒たちが意欲的に取り組めるかは、生徒が活躍できる場を教師側が、いかに提供できるかが、大きな課題である。また、教師の姿勢は、全教職員共通認識として、規律を重視しながら、毅然とした生徒指導の意思統一で、生徒に混乱を与えず、相互理解のもとお互いが成長していくことが、教職員の大きな課題であるといえる。

今後も、現場で模索しながら、「生徒たちが意欲的に取り組む」理想の教育を目指していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 中間茂治「理想の教育、高校野球を求めて～全国初、衛生看護科硬式野球部誕生～」野球文化學會論業第10号：野球文化學會；2009年p337- p 338
- 2) 中間茂治「理想の教育、高校野球を求めて その2 ～白衣の球児たちの挑戦～」野球文化學會論業第11号：野球文化學會；2010年 p 325-p326

参考文献

- 嶋崎政男「教育相談 基礎の基礎」：学事出版；2006年
 嶋崎政男「生徒指導の危機管理」：学事出版；1998年
 月刊生徒指導：学事出版；2012年7月号